

## エッセイ特集2 ヴィクトリア朝研究の現在

### Late Modern English 研究の潮流

堀田 隆一

#### 1 後期近代英語研究のブーム来たる

この20年ほどの間、特に21世紀に入ってから、英語史の分野では18-19世紀の英語、すなわち後期近代英語 (Late Modern English, 以降 LModE と略す) への関心が高まってきている。この時期の英語に関する本格的な研究書が現われはじめたのは1990年代のことであり、2000年代からは概説書やハンドブックの類がいくつも出版されるようになった。言語学や文献学を専門としない読者にとっても読みやすい入門書としては、Tieken-Boon van Ostade, Ingrid. *An Introduction to Late Modern English*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2009. がお薦めである。

一方、2001年にはエディンバラ大学にて後期近代英語に焦点を当てた初の国際学会 International Conference on Late Modern English (LMEC) が開かれ、その後も順調に回を重ね、2017年8月には第6回大会がウプサラ大学で開催されている。この学会と関連して編まれた論文集も継続的に出版されている。

このように LModE の研究が近年にわかに活況を呈してきているが、なぜ今 LModE なのだろうか。逆にいえば、なぜこれまでの英語史研究では LModE が本格的に扱われてこなかったのだろうか。従来の英語史研究において LModE の評価が低かったことは、しばしば引用される Jones の句 “the Cinderellas of English historical linguistic study” に端的に表わされている (Jones, Charles. *A History of English Phonology*. London: Longman, 1989. p. 279)。現代英語に最も近い時代の英語が正当に評価されてこなかっ

たというのは、考えてみれば奇妙である。英語史が長い伝統を誇る学問領域であるだけに、なぜ今 LModE なのか、ますます疑問に思われるかもしれない。

本稿の第2、3節では近年の LModE 研究のブームの学史的な背景を明らかにし、第4節で近年の研究の概要を紹介する。最後の第5節では、このブームが今後の英語史研究においていかなる役割を果たしうるかを論じたい。

## 2 なぜ従来 LModE の評価が低かったのか

まず、従来の英語史研究において LModE がどのように扱われてきたかを概観しておきたい。20世紀の英語史研究では、英語が過去1600年ほどの間にたどってきた体系的な変化の記述が重視されてきた。もちろん、その記述の基盤となっていたのは、古英語、中英語、近代英語など各時代の英語の共時的な記述である。特に中世英語については文献学的な研究が盛んであり、中世文学・文化研究との接点も豊富で、知見が蓄積していた。この知見に基づき、英語の体系的な変化が詳細に記述されてきたのである。

言語体系の変化に注目する伝統的な英語史によると、最もダイナミックなのは、文法でいえば古英語から中英語にかけての時期であり、語彙でいえば諸言語からの借用が断続的にみられた古英語から中英語を通じて初期近代英語に至る時期である。つまり、英語史において注目すべき言語体系上の変化は、せいぜい初期近代英語までで終わりであり、それ以降はほとんど体系的といえる変化は起こっていないことになる。体系的な変化にこだわる限り、LModE には語るべきものがほとんどない。

確かに、現代英語の読者は LModE で書かれた文章をほとんど違和感なく読み進めることができる。文体やジャンルの現代との差異や当時の時代背景に関する知識の不足により、多少の読みにくさを感じることはあっても、言語体系上の違いを感じることはない。現代英語と LModE に関するこの直観的な同一視もまた、LModE をじっくり観察しようという動機を弱めてしまう要因の1つだろう。

もう1つ指摘しておくべき点は、従来、英語の言語体系というときには、

近代に徐々に確立してきた標準英語 (Standard English) の言語体系のことを暗黙のうちに指していたことである。しかし、まさに同じ近代を通じて英語は世界中に拡散し、新たな非標準変種を多数生み出してきたのであり、それらのなかには著しい体系的变化を遂げたものもあった。つまり、標準英語以外の変種に目を向ければ、体系的な変化は近代以降にも起こっていたのであり、その意味で英語史はまだ終わっていないのである。しかし、20世紀の英語史では、このような見方は本格的に採用されなかった。

### 3 なぜ今 LModE なのか

では、なぜ今世紀に入ってから、従来の評価が見直され、LModE が注目されるようになったのだろうか。ある見解によると、ミレニアムが理由の1つだという。19世紀がもはや「前世紀」ではなくなり、LModE と現代英語の間に「安全な」距離があると認識されはじめたのだという。研究者が19世紀を歴史として捉えられるだけの時間差と心の余裕を得たということである。

しかし、これは取って付けた理由のように思われる。もっと本質的な理由は、主として学史的な背景と、それに伴う言語研究の視点や方法の変化にある。具体的にいえば、20世紀後半に発達した社会言語学とコーパス言語学の役割が非常に大きい。

社会言語学は、ソシュールからブルームフィールドを経てチョムスキーに至る20世紀の主流派による構造言語学へのアンチテーゼの1つとして発展してきた。構造言語学が体系としての言語という見方を前面に押し出すのに対して、社会言語学は社会における言語の変異のあり方に注目する。社会言語学でも発音、文法、語彙などに注目するが、それらの内部構造を探るのではなく、それらが性、階級、民族、国家、対話の状況などの社会的要因によって、いかに個人間、方言間、言語間で変異するかといった側面に関心をもつ。例えば、標準英語の文法構造を解明することよりも、どのような社会的状況で人は標準英語の文法を用い、どのような場面で非標準英語の文法を用いるのかを明らかにすることを目指す。したがって、社会言語学は非標準英語を含む多様な英語変種の存在を前提とし、さらにそ

の役割を積極的に評価する立場を取る。このような新しい言語学の興隆は、英語史研究の対象となる「英語」のとらえ方を、従来の“the (Standard) English”から“Englishes”へと転換させるのに一役買った。また、社会言語学と平行して、言語使用の現場を考察対象とする語用論が発展してきたことも、言語研究において変異を重視する傾向を着実に後押ししてきた。

一方、コーパス言語学は、20世紀後半の技術的な革新により利用可能となった電子コーパスと、そのための諸ツールが開発されたことに端を発する。研究者個人では扱いきれなかった量のデータを、高速、客観的、かつ一貫したやり方で検索・分析することが可能となり、言語研究の幅が著しく広がった。コーパス言語学は、現存する資料が有限である古い時代の言語研究とは相性がよく、早い段階から英語史研究にも導入されていたが、その方法論が洗練されていくにつれ、コーパスは英語史研究にとって必要不可欠な道具となり、現在に至る。紙幅の都合上、近年続々と編纂・公開されている LModE のコーパスを逐一紹介することはできないが、ヘルシンキ大学の研究チームが開設している歴史英語コーパスの情報センター“CoRD”にて最新のコーパスの一覧が閲覧できるので、そちらを参照していただきたい(<http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/corpora/index.html>)。

社会言語学とコーパス言語学の実展は、他の時代の英語の研究にも影響を及ぼしているが、とりわけ LModE の研究に利すると言える理由がある。それは、上述したように LModE には著しい体系的変化はみられないものの、社会的な要因による言語変化や言語変異を示す証拠が豊富にあり、さらにそれを入手しやすい状況が整っていることである。また、LModE は諸変種が出現し、新ジャンルが加わり、言語資源が激増した時期であり、しかもその情報に比較的自由にアクセスできる時期でもあった。

LModE 期には、様々な英語変種が生まれた。もちろん、英語の歴史を通じてブリテン諸島内だけでも多様な英語変種が常に存在してきた。しかし、この時期には、従来のブリテン諸島内の英語変種に加えて、北米、カリブ地域、アフリカ、南アジア、東南アジア、太平洋地域など世界の諸地域に移植されて独自の発展を遂げた英語変種が多数現われた。LModE 期は、20世紀後半から21世紀にかけて各々のアイデンティティを主張することになる幾多の“Englishes”の形成期に当たるのである。変種を重視する社

会言語学の興隆は、研究対象としてイギリスの標準英語だけを念頭におく従来の英語史を断罪し、イギリスの非標準英語を含め、世界中の英語変種を研究対象に据えるべきだという新たな英語史観をもたらしたのである。

ここから、標準英語を批判的にとらえる立場も生まれた。標準英語およびそれと結びつけられる規範文法の伝統が、近代史の中でいかにして作り上げられてきたか、いかにして権威を付されてきたかという問題への関心が高まり、その起源と発達が、すぐれて現代的な問題と結びつけられて取り扱われる機運が生じた。また、変種を重視する視点は、英語使用における話者の男女差や階級差といった話題への関心も呼び覚まし、LModE 期は現代の英語使用のルーツを探る上で不可欠な時代であると評価されるようになった。

ジャンルの広がりも、LModE を特徴づける現象である。伝統的な韻文や散文に加えて、新たな散文ジャンルとして小説が現われ、新聞が出版され、科学論文が書かれるようになった。社会のあらゆる階層の人々が頻繁に私信を書きはじめたのもこの時期である。18世紀の辞書や文法書の出版ラッシュを始め、19世紀には各種のマナー本が著わされた。それに伴って、新たな文体が続々と出現し、開発された。

上記のように英語の種類が増えたばかりではなく、その量も絶対的に増大した。そこへ量をさばける電子コーパスというツールが20世紀後半に現われ、LModE はそれを最大限に利用できる時代として注目されるようになったのである。コーパスはまた、30年間ほどといった比較的短期の言語変化や、低頻度の言語事象に関わる変化や変異を研究対象とすることを可能にした点も付け加えておきたい。コーパス言語学が、体系的な変化はなくても軽微な変化には事欠かない LModE と相性がよいのは、このような点にもある。

このようにして、社会言語学とコーパス言語学の発展により、英語史研究者にとって研究すべきことと研究できることが一気に増えた。そして、その効果が他の時代よりも強く感じられたのが LModE だったのである。

#### 4 どのような研究がなされているか

近年盛り上がりを見せる LModE 研究を概括することは、紙幅の都合もあるし、そもそも筆者の能力を超えている。以下では、あくまで筆者の目にとまった分野ごとの研究の輪郭を紹介し、研究の潮流を感じてもらうにとどめる。

LModE の音声の研究は、方言・変種間の変異という観点からなされることが多い。当時の発音の正確な音価を解明するために、当時の発音辞典や、言語観察者による発音に関するコメント等の資料を批評的に読み解くという作業が精緻化しているほか、何とか読み書きできる程度の教育を受けた人々による綴字を、当時の発音の証拠とみなして分析する手法も取られている。LModE における母音後の *r* の発音の有無や *h* の脱落の分布の解明は、現在まで続く非標準変種に対する偏見を巡る問題に、歴史的な観点から光を当てるものである。全体として、この時期に関する音の研究は、音韻体系の変化を扱うというよりは、社会言語学的な含意を伴った発音の変異を扱う社会音声学 (socio-phonetics) の色彩が濃い。

上に示唆したように、音の研究は、綴字の研究と密接に結びついている。LModE 期はサミュエル・ジョンソン、ノア・ウェブスター、ジェームズ・マレーなどの辞書編纂家が活躍する時代でもあり、綴字については従来、標準化と規範化が主たる話題とされてきた。しかし、近年は私信などの手書き資料にみられる綴字の調査が本格的になされるようになり、新たな綴字の見方が現われてきている。それは、手書きの綴字は印刷物の綴字とは異なる世界に属しており、必ずしも規範遵守の対象とはならなかったというものだ。ジョナサン・スウィフト、サミュエル・ジョンソン、ジェーン・オースティン、チャールズ・ダーウィンなどの印刷原稿と私信での綴字を比較すると、前者では出版・印刷業者の介入があるために往々にして現代的な規範が適用されているが、後者では現代の読者の目にはあたかも無教養にみえる「誤った」綴字が頻繁にみられるという。公に正書法の重要性を説いたスウィフトやジョンソンですらそうだったことから、当時、綴字の規範意識はあくまで印刷物にのみ適用されるべきという見方が普通だったとわかる。

文法に関する話題としては、第2節で述べたように、LModE 期には体系的な変化はほとんど生じていない。つまり、新しい文法項目が加わったり廃れたりという、革新的なことはほとんど起こっていない。しかし、既存の文法項目の頻度や用法がこの時期の間に变化した事例は少なくない。この時期の文法変化は、体系的なものというよりも、統計的、文体的なものであるといってい。頻度の増減や使用域の移動といった、よく注意しなければ気づきにくい使用の機微のレベルでの変化であり、だからこそコーパスによって可能となった量的な研究と合わせて、広い意味での文脈を考慮に入れた質的な研究が必要となる。例えば、この時期、話し言葉では接続法(仮定法)の衰退が着実に進行していたが、規範文法においてはむしろ接続法の保存が主張されており、接続法の使用が社会言語学的な尺度となっていたことが明らかにされている。また、疑問代名詞・関係代名詞 *whom* の衰退は現在も継続中の現象だが、*whom* と *who* の頻度の変化を比較するととどまらず、格式(formality)の高低という文体的な要素も考え合わせなければ、その衰退について有意味な記述は得られない。全体として、複数の(社会)言語学的なパラメータを掛け合わせ、コーパスによって得られた統計値をもとにして詳細で精密な分析を施すタイプの文法研究が増えてきているといえる。この傾向は、英語史の他の時期の文法研究にもみられるようになってきているが、社会言語学的な情報を豊富に入手でき、大規模なコーパスを編纂しやすい LModE において、とりわけ際立った特徴だろう。

文法と関連して、英語学史的な関心から、規範文法(家)に関する記述も増えてきている。背景には、現在でも根強く残る規範意識を論じるにあたっては、規範文法の基礎が築かれた18世紀と、その地位が固まった19世紀の状況を理解しておかなければならない、というもっともな発想がある。上述の綴字のケースと似ているが、規範文法の権化とされるロバート・ラウスが、私信において自らが文法書で主張したものとは異なる文法を用いていたという指摘がなされている。18世紀=規範文法の世紀、という固定的なイメージの脱神話を図る試みは、規範文法と、しばしばそれと対置される記述文法との間に、広く信じられているほどの明確な境はないとする最近の言説にも現われている。

語彙に関しては、伝統的な研究成果の批評的解釈に関係するものが多い。英語史における新語導入の通時的变化は、従来 *OED* などの大規模辞書をもとに調査されてきたが、*OED* のツールとしての有効性や、そこから得られるデータの解釈の仕方といった、メタな議論が盛んである。例えば、19世紀は語彙爆発の時代とみなされてきたが、それは *OED* が主として19世紀後半の産物であり、直近世代の文献資料にアクセスしやすかったがゆえに、19世紀の語彙が過剰に収集されたからである、とする議論が典型である。

ジャンルに関しては、すでに触れたように、LModE は様々なジャンルが開拓された時代だった。各々のジャンルが独自の研究対象とされており、ジャンル間の比較についても優れた洞察がある。例えば、英文法書と料理のレシピ本という2つのジャンルの意外な共通点が指摘されている。両ジャンルともに近代を通じて出版が伸び続け、とりわけ18世紀後半に増加した。また、その需要はいずれも上昇志向の強い中流階級に支えられていたという。いずれのジャンルも、気品ある紳士淑女にとって「たしなみ」ととらえられていたことがわかる。さらに、著者たちが「改善」と称して、既刊書からの剽窃を当たり前のように行っていたということも共通点である。

最後に、諸変種の研究も活発である。イギリス諸島の非標準方言やアメリカ英語に始まり、英語ベースのピジン・クレオール語に至るまで、記述研究やルーツを同定する試みが幅広く行なわれている。世界中の多くの英語変種が LModE 期に形成され、発展してきた事実を考えると、現代の諸変種の記述の基盤として、この時期に注目が集まるのは自然だろう。

上で述べた諸分野の研究の動向に共通しているのは、言語の変化や変異に対する研究者の態度の変化を反映していることである。そして、その変化の影響をとりわけ被りやすいのが、現代英語の直近の時代たる LModE だったというわけである。

## 5 LModE 研究とこれからの英語史

近年、英語史において LModE の研究が盛んになってきた背景と、その研究のあらましを覗いてきた。本稿を閉じるにあたって、このブームが英

語史研究にいかなる貢献をなしうるのか、希望的観測を含めて考えてみたい。

まず、LModE の研究は、英語史の通史記述を完成させるのに必要不可欠である。英語学の分野で現代英語の記述や理論が洗練されてきたことは周知の通りであるし、中世英語についても英語文献学の伝統に支えられて多くの知識が蓄積されてきた。しかし、先に述べたように近代英語期は注目されだしたのが遅れた。誤解をおそれずに言えば、英語の通史は近代英語の部分が抜けた中途半端なものにとどまっている。LModE 期は、英語史を完成させる最後のピースなのである。

最後のピースというのはネガティブな言い方だが、ポジティブに言えば、LModE は現代英語と中世英語の研究を橋渡しするものとして重要な役割を担っているとも考えられる。実際、現代英語と中世英語をとともに専門的に扱う研究者は少ないが、近代英語に親近感を抱く現代英語の研究者は増えてきているし、中世英語から近代英語にかけての時代を守備範囲とする研究者は比較的多く存在する。いずれの時代の英語の研究も、通時的に広い視野から行なうのが理想とはいえ現実には難しいものだが、近代英語を足場にし、そこから前後の時代を見渡すというスタンスであれば、もう少し敷居が低くなる。近代英語には、現代と中世の双方から歩み寄ることのできる「出会いの場」としての役割がおおいに期待される。

また、現代英語を説明するために提案される種々の言語理論や社会言語学・語用論上の概念を歴史的に応用しようとすれば、まず現代の直近の時代、すなわち LModE に適用してみるのが妥当だろう。現代に比肩する質と量のテキストや情報にアクセスできるからである。つまり、LModE には、様々な(社会)言語学上の仮説が歴史的に応用できるかどうかをテストする実験場としての役割がある。ここで成功すれば、さらに古い時代への応用可能性も開けるというわけである。

もう1つ、社会言語学や語用論の立場からの歴史研究が LModE を中心に定着していけば、文献学的英語史の伝統が強化されることになるだろう。というのは、社会言語学や語用論は理論言語学と異なり文学や文化の研究との接点が多いからだ。もちろん、筆者は理論言語学によって英語史の知見が深まってきたことを否定するものではないし、文献学的英語史がより

優れているというつもりもない。むしろ両視点を合わせた英語史研究が増えてくることを期待している。

最後に、LModE 期は諸変種の形成期に当たるという点を改めて強調しておきたい。今後、21 世紀の英語を論じる上でますます重要になっていくと思われる“Englishes”という概念を真に理解するためには、LModE 期の研究をないがしろにするわけにはいかない。

LModE は、しばらくの間、英語史研究に新鮮なエネルギーを注ぎ続けてくれるだろう。筆者は主に中世英語を専門としているが、時代に取り残されないよう LModE にアップデートしなければ、と感じる次第である。

——慶應義塾大学教授